

「資本主義」と文化意識

—ホルクハイマーの『権威論』研究—

森田 数実

(目次)

序章 ホルクハイマー研究の基礎視角

第一節 問題の所在

第二節 物象化論と権威論

第三節 『社会哲学の課題』

— 論文の構成 —

第二章 精神分析の導入

第一節 フロムのフロイト理解

第二節 ホルクハイマーと「心理学」

第三章 文化連関と「交換経済」

第一節 文化連関の視座

第二節 ホルクハイマーの市民社会観

第三節 市場と権威

第四章 家族論の内包

第一節 市民的家族の概観

第二節 フロムの権威論

第三節 ホルクハイマーの家族論

補論 ナチズム論の諸類型

第五章 ナチズムの問題

第一節 市民社会の内的矛盾とナチズム

— 『エゴイズムと自由を求める運動』を中心に —

第二節 ポロックと「国家資本主義」の理論

第三節 全体主義の時代

— 『権威主義的国家』を中心に —

終章 結びにかえて

限られた紙数、時間の中で前記修士論文を要約することは困難であり、また生産的な作業とは思えない。そこで、以下ではホルクハイマーの「権威論」の内的構成を追求めた修士論文の(1)問題の所在と、(2)ホルクハイマー社会理論の基礎とも言うべき、物象化論と権威論の関係を議論することにより、私の修士論文への展望を与えておきたいと思う。

まず一般的な問題状況について。本論文は、ヴィルヘルム期ドイツの社会学者たち(広く「世紀末の社会学者」たち、ヴェーバー、ジンメル etc.)に芽生えた「反進歩」、Anti-Progress と総括しうる問題の諸帰結をワイマル文化の中に追求する、という構想のもとに着手された。この問題群の輪郭はひとまず以下のように言うことができる。共同体的絆(communal bonds)の急激な崩壊と破壊、経済生活の手段から目的への転化、没落する社会を変化させる運動の没落の構成要素への不断の吸収。(Arthur Mitzman, *Sociology and Estrangement*, p.4) 19世紀の末から第一次大戦にかけての4半世紀、つまり近代から現代への歴史の転換期における「資本主義的」産業化の急激かつ全面的な進行は、社会の構成原理への問いを必然ならしめた。この場合、社会の構成原理の問い直し作業は、各社会学者によって独自に行なわれる。しかし、その場合に注目すべき点は、第一に、逆説的にもこの問い直し作業の過程で「資本主義」Kapitalismus という概念が、ヴェーバーやゾンバルトといった、いわゆるブルジョア社会学者の手によって独自に考えぬかれた概念として提出されてくる、という点である。経済と社会の「資本主義的」体制という場合、諸々のメルクマルが挙げられるであろうが、その基礎は、生産手段の私的所有原理と、生産物の社会的プロセスにおける交換による分業(社会的分業)とみて大過あるまい。しかし、この経済と社会の「資本主義的」体制が問題を孕む、という場合、その内包はそれほど明確ではない。(市場システムの経済的有効性如何、剰余価値の収奪、等)これは再度規定し直される必要があるわけである。さらに第二に、レーヴィットの著名な論文以来一般化したごとく、マルクスにしてもヴェーバーにしても、経済と社会の「資本主義的」体制が固有の探求の対象となったのは、この領域が経済と社会についての特殊な、他の社会領域から分離して取り扱うべき問題を含んでいるからという理由だけでなく「この領域には現在の人間、それも社会的ならびに経済的問題性をにほう基礎として人間が、問題とするに足る人間性をもったものとして、そっくり含まれているという理由」(レーヴィット、『ヴェーバーとマルクス』pp.)に着目することが重要である。つまり、経済と社会の「資本主義的」体制を、マルクスは自己疎外の極致として、ヴェーバーは「合理化」の到達点として、いずれも一定の原理の帰結と考えているのである。以上の二点に注意して、Anti-Progress という問題を見ると、それが資本主義・文化(Kultur)を焦点にしていることが理解される。ミッツマンの言うごとく、社会学者、個人のパーソナリティーのレベルでは、一様に達成価値からの後退が指摘しうるのである。以下で、現在の日本の進んだヴェーバー研究を参照しつつ、ヴェーバーにおけるこの問題の胚胎について若干記してみたい。

ドイツ「近代化」論者の雄として登場したヴェーバーは病気を境にして研究の視角を大きく変化させる。そして、その基礎が病気に抱いていた自らの諸価値をむしろ自明なものとするとはできない、という点にあることは研究者の間では一般化している。つまり、病後のヴェーバーは、目の前に展開する社会を不可解なもの、異和感を持つものとして対象化する地点に自らを置くのである。いくつかの例を引こう。資本主義システムにおいて、企業家にとって「管利」は自己目的となる。「管利は人生の目的と考えられ、人間がこれによって物質的生活の要求を充たす

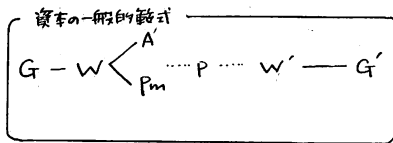
ための手段とは考えられていない。」(引用は『フロ・倫』から、以下同じ) 完全競争市場において「蓄積せよ、蓄積せよ」という資本の定言命法に耐え得ないものは、端的に淘汰されるしかはないわけで、「営利のための営利」は、そのような客観的な条件下で生き残るための、言わば前提をなす。しかし、今一歩つっこんで考えてみると、行為主体が「一切の自然の享樂を厳しく拒けて、ひたむきに貨幣を獲得しようとする努力は、幸福主義や快樂主義などの外衣」をまったく帯びていて、言わばまったく非合理であり、反自然的であり、この行為を人が何故不断に行っているのか、と問わざるを得ない。ところが、病氣前のヴェーバーによって、状況を計算し、自由な目標選択をしつつ、禁欲的に目的実現に努力する人間像は意味的に自明と考えられていた。病氣後のヴェーバーは、経済とは領域の質的に異なる宗教領域へと視点をずらし、行為の動機を、資本主義の「精神」→ピューリタニズムの倫理、と溯及させ、ヴェーバー社会学のキーワードであるエートスの領域を明確にとりだす。ここにおいて、西欧市民階級に固有の経済心情と宗教心情の親和関係が解明され、倫理、エートス、心情と多様に表現されるべき的価値は 禁欲 Askese と指摘される。ヴェーバーは開病生活を経て、自らの持っていた価値を対象化することにより、その呪縛から一定程度自由になることができたのである。そして、個人的には、禁欲主義から退後してゆく。この間の事情はミッツマンによってようやく解明された。

以上の、マックス・ヴェーバーの先駆的な業績によって、それも問題にせざるを得ないものとして探究された資本主義・文化の問題は、ワイマール文化の中でどのよう
に深められているのか？これが、本研究に向かう私の問題設定である。ワイマール文化の中から初期フランクフルト学派が選ばれるのは、ワイマール文化の中で一定の社会理論 Theorie der Gesellschaft を明確に提出するのはこの学派を筆頭とすること、さらにこの学派がフロイトの理論を導入すること、等による。先にヴェーバーがエートスと言い表わした心情はフロイトの用語に翻訳され、新しい、現代の用語で規定し直される。(eg. 「超自我」による欲求の内面化など) そして、学派を主宰したマックス・ホルクハイマーの、個人史を一極に、ナチズムへと連なるワイマール共和国の社会・経済的変化を多極に、その『権威論』の問題構成、内包、そしてナチズム把握を追求すること、これが本論の内容をなす。以下では、この稿の残された一課題、物象化論と権威論の関係を論ずる中から、ホルクハイマー社会理論の内容の外郭を与えようと思う。

フランクフルト学派の社会理論の基礎的視角が物象化 (Verdinglichung) 論であることはすでに指摘されている。しかし、学派の初期の共同研究は権威 (Autorität) 論という総括的な名辞を与えられている。この二つの理論の間には従来ほとんど言及がなされてこなかった。以下で学派とルカーチの関係を含頭にこの問題を少く議論しよう。(物象化論そのものの議論は修士論文を参照されたい。)

物象化とは一般的には人間が客観的な事物を作り出した主体でありながら、この事物がそれ自身の合法則性にしたがって運動するという事態をさす。その基礎は、社会の欲求充足 (Bedarfsdeckung) が市場における交換行為に媒介される点にある。この転化プロセスは $W-G-W$ という商品流通の $G-W-G'$ という資本の自己増殖が

プロセスへの転化として捉えられること、これはもはや周知のことである。ひとまず資本の価値増殖過程=労働力の交換関係を明示した、有名な資本の一般的範式を図示しておこう。



若干の説明を加えよう。商品交換のくり返しは諸商品の中から価値尺度としての一商品、貨幣を析出する。価値論から言えば、商品の価値(使用価値)とは次元の異なる交換価値が成立するわけ

で、各商品はこの一般的等価形態によって価値づけされることになる。(商品形態の矛盾)商品交換が一般化した社会においては、人間と人間との関係が、この一般的等価形態、直接には貨幣の所有量から規定される、つまり関係が対象性という規定を受ける。関係の自立化と共に、主体がその関係を媒介して自らを規定するから主体は抽象的な自己意識として自立する。したがって、主体的な点でも客体的な点でも、商品に対象化された人間労働の抽象化が生ずる。(抽象の支配)ルカーチの場合、個別企業内の労働過程=組織形態に関してヴェーバーの計算可能性を目的とする合理化の原理が導入され、そのための必要な前提として、(1)労働過程が計算できるものとなるためには、生産物そのものの算的に規定されている有機的・非合理的な統一の分裂=専門化と、(2)労働過程の機械化の機能的な担い手としての人間の合理的分解があげられることにより、抽象性というメルクマールに力点がおかれている。ともあれ、平田清明の定式化によれば、交換過程を通じて、つまり「外化=および譲渡を通じての領有」としての私的所有の世界として市民的=資本主義的社会が成立し、そこにおいては協同本質 Gemeinwesen としての貨幣の、より根本的には人間そのものの対象的な規定としての商品物種という幻想が成立し、具体的な人間関係は覆われることになる。

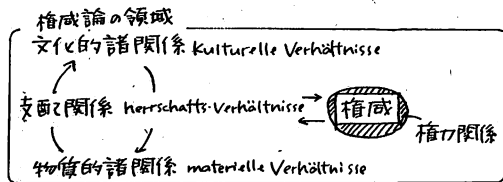
以上が最近のマルクス研究の展開の中で解明されてきた物象化論の粗描である。ルカーチの体系の検討はここでは省略し、ホルクハイマーの権威論にひきつけながら、物象化論の問題構成へと議論を集中しよう。問題は個的なレベルと関係性のレベルの結節のさせ方にある。人間が諸関係の中の要素として給付を事実として行っている、ということと、その各個人がどのような意味でそれを行っているのかということの間はそれほど直線的につながるものではない。社会科学方法論のレベルでは行為の動機づけの問題として、マルクス主義においては上部構造の相対的自立性の問題として議論される、終じて意味の問題は依然残るのである。物象の人格化として処理される、この領域をどう理解するか?ルカーチが強調する労働過程の機械化、抽象化は訓練された労働力なしには不可能であろう。ここにわれわれは、物象化論の問題を、エートス論へ、行為主体論へと展開させる道を見るわけである。このことの明確化のためには、人間社会における社会的活動連関の成立について一瞥を与えておく必要がある。

構成個体のある集合である社会は、さまざまな社会的活動を一定連関において複合する過程、つまり社会的活動連関であるが、人間社会と比較霊長類との対比から明らかになることは、(1)個体生命力の社会労働力単位への変換をとおして社会生産

力を形成すること、(2)それ以前には未知かつ未在な社会的価値群を社会的諸活動が追求すること。の二点において人間社会は特徴的であることである。つまり、社会の再生産は財の生産・連関から生ずる分業体系と、それとは機能的に分化した宗教・政治等の領域の媒介をへてなされる。社会的活動連関の制御という点から見ると、人間社会の場合、本能その他の生得的コミュニケーション・ネットワークが極めて低い程度にしか存在せず、個体間物理的通信を有意義な情報に記号化しまた復号化する通信-情報変換基準が未確定であるため、それを作為する必要がある。このプロセスで個体は主役とし、逆に観念の作用力が及ぶ限り集落規模の拡大が可能となる。個体間共存関係における通信不全の過剰圧力に対し、作為による観念の独自の世界を作りだすこと。その過程における個体存在形態の対象化により通信不全過剰組織を作る問題、これは生物ないし社会サイバネティクスの問題と云いうる。(前田 康博)サル社会の場合、個体間の関係は種属の特性に先天的に規定された生得的行動様式をもってする直接結合であり、この結合は支配-被支配の役割分布として構成されるから、社会的活動連関の平衡制御は一定の支配体制の維持として達成される。しかし社会的生産力未形成のゆえに個体として集団から分離できないサル社会の支配はあくまで集団の生存の保全であり、その枠内で支配と指導が実力主義を構成原理として重なりあうわけである。人間社会の場合「死んだ労働」と「生きた労働」の結合による社会生産力の形成は剰余価値を生み、その管理権をめぐって収奪者と被収奪者の分化、制度化がおこる。そこに、支配体制と社会的活動連関の機能的分化を制御する、という政治の領域が開かれるのである。ところで、サル社会から人間社会への移行における個体労働力の社会的労働力単位への変換による社会生産力形成の契機は何か? 制御理論からする通信不全の過剰圧力の他に注目すべきは人間社会の成立は、現象的に原始宗教の発生と同時であることである。そしてその説明としては、社会構成員の、自然に抱かれた生産=消費の水準を破る自己強制という契機があげられる。社会生産力形成のためには、構成個体の側の社会のレベルでの給付に耐えうるごとき、自然衝動の断念、Triebverzichtが前提される。この自己強制が外的強制に由来するという理解は、その外的強制の実力根拠も権利根拠も転化する問題を解き得ず、かつ強制の結果剰余労働が得えれるという因果関係を認知し、しかるにこれは比較動物学的に無理であるから、この自己強制は何らかの事情で始まった自発的労働に求められねばならない。フロイトの用語で言えば、衝動の抑圧、そして昇華により人間は新たな社会性の水準を入力する。原始宗教の喚起する観念、無限の罪業と無限の救済という二重の無限観念に対応する無限の魂、という社会の虚の次元は多様に分化し一つ社会のシンボル層を形成する。つまり、人間社会の成立に関して、社会的生産力形成-交換の発生-内的強制-シンボル層の相対的自立、という一連の関連する事態を規定できるのである。

以上の考察を支配関係 Herrschaftsverhältnisse にひきつけて見た場合、権威論の領域が明らかとなる。人間社会における社会生産力形成は、個体の側における自己強制とシンボル層形成と同時である。そして社会生産力は剰余価値を生じ、これへの管理権をめぐって収奪が発生する。一般的には社会活動連関の維持のため、特殊には

そこから利益を引き出す者の保障のため、人間社会はつねに被支配者の側での「従属」Abhängigkeitの肯定を必要とする。ここに、社会における物質的諸関係と文化的諸関係を媒介し、支配の正当性根拠という契機を内包する領域として権威論の領域が設定できる。ホルクハイマーの社会理論は、社会の分業構造と支配構造の絡まり

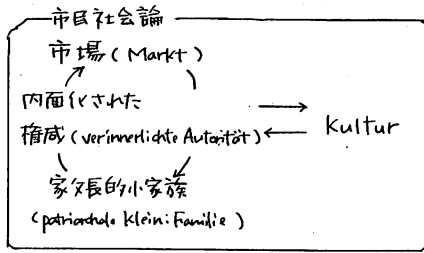


を、文化の理想や願望に表現を与えるという文化的機能と、(b)それらのシンボルを介してなされる支配手段としての機能、つまりイデオロギー機能、という二重機能に焦点をあてて考察するところに成立する。(この文化連関

Kulturzusammenhang についての詳細な検討は本論の該当箇所を参照されたい。)

さて物象化論との関係はどうか？自由な流通経済(freien Verkehrswirtschaft)の展開を土台とする「市民社会」とそれ以前の社会形態を特に支配の観点から見るとどのような違いがあるか。近代以前において社会的支配はトーテムや教会の権威といった経済外的強制(LUCA-4)を媒介して行使されるのに対し、経済的メカニズムが自立化する近代社会においては、社会関係そのものが権威化するということがおこる。市場における交換行為に媒介される近代の社会的労働過程は、その不透明性ゆえに(年末の貸借対照表における活動の社会的有用性判断など)人間関係のネットワークそのものを権威化される。客観的な規範を欠くことにより、社会構成員は自らの業績(Leistung)のみを頼りとする。ここにおいて、事実としての個人主義的社会原理が成立すると共に、権威が個人内に内面化(Verinnerlichung)されるということがおこる。社会における事実としてのエゴイストイックな原理の成立は、逆説的にも成員の側での徹底的な欲求の内面化を帰結するのである。Kulturに目を向けると、マックス・ヴェーバーによって分析されたプロテスタンティズムを含めて、市民社会における文化的諸力をホルクハイマーは市民的道德(bürgerliche Moral)の問題として把握する。ホルクハイマーは、近代の文化的諸力の中に響いている意味コードが、何らかの一般性を前提にして自らを計るということ、つまりエゴイズムの呪詛であることを指摘する。これは社会的事実的な状況とは逆の符号で人間を判断することであり、この道德の助けで市民(Bürger)レベルでは競争が制限され(「ホッブズ問題」の一解決)、また大衆に対する支配が行使されることになる。経済と文化とを結合する心的媒介の領域にはフロイトの理論が導入される。幼児性欲以来のリビドーの変形プロセスとして人間の心的現実を理解しようとする精神分析は、ホルクハイマーの市民社会論において、特に市民的家族における父-息子関係(Vater-Sohn-Verhältnisse)における良心(Gewissen)形成という点に着目される。ホルクハイマーの家族論の詳細は本論に譲り、ここでは市民社会分析の制度的単位として家父長的小家族(patriarchale Klein-Familie)が指定されることのみを指摘しておく。ホルクハイマーの市民社会論は、内面化された権威、を中心に市場-家族-文化の連関として構成される。市民時代の初めにおいて伝統の権威に対して激しく闘われた自由を求める運動は市民時代の終りに単なる権威賛美に終る。(ナチズム)内面化された権威を中核とする

市民文化の機能転化プロセスを追求すること。これがホルクハイマーの権威論の問題構成である。そして、一定の条件のもとでの市民社会のナチズムへの移行の必然性



性と「社会主義」への問いが、ホルクハイマーの論文の中に響くことになる。各契機の内在的分析、転化プロセス、そしてホルクハイマーのナチズム把握は本論に譲り、ここでは幾つかの点を指摘することにした。

(1) 市民道徳の抑圧機能について。超自我形成による欲求の内面化は、ヨーロッパ社会に

おける広範な性のタナー化と結合して大衆レベルにおいてサドマゾ的なコンプレックスと化してあらわれた。ホルクハイマーは、これを市民的ニヒリズムと関連させて論じている。(第5章、第1節のⅢ)

(2) 生成期のナチズム把握について。ホルクハイマーの把握は、本論でもその一端を論じておいたホナパルティズム論と近い形態をとっている。市民社会の内的矛盾、つまり利潤を求める都市の市民階級の利害と、絶望した都市と農村のプロレタリア化された大衆の広範な利害との矛盾が、高揚(Erhebung)における指導者-従者間の心理学的関係、さらに様々な象徴の非合理的な作用の中に吸いこまれてゆく、という理解はナチズム研究の展開と共にその正当性が確認されてきている。(補論を参照されたい。)

(3) 全体主義把握について。ドイツ系大衆社会論のペシミスティックな色調と共にイメージされる全体主義的秩序は、学派において市場の消滅-全体社会の官僚制化を軸に、私的資本主義から国家資本主義への転化として把握されていること。家族の実際的崩壊、テクノロジーの登場と絡めて、この間の事情は第5章、2,3節で述べた。

以上で議論を終りたいと思うが一つ言っておかねばならないことは、現在の私にとってホルクハイマーの家族論がまだ十分に消化されていない点である。文化的土壌のまったく異なる日本の状況から市民的家族を理解するのは困難である。マンハイム、マルクーゼの記述でイメージ作りに努めたが、まだ十分ではない。フロイトの理論が他の文化圏にどこまで応用可能か、また「小家族」のホルクハイマー社会理論における位置の確定、さらに史的な位置等の考察は今後の課題としたいと思っている。

最後に申し添えておきたいことは、'30年代ホルクハイマーの最もすぐれた論文である『エゴイズムと自由を求める運動』、『Egoismus und Freiheitsbewegung』、『モンテーニュと懐疑の機能』、『Montaigne und die Funktion der Skepsis』の二論文の拙訳が、青やまコピーできるようにになっているので、興味のある方にはすぐコピーしてさしあげられる点である。本人に申し伝えていただきたい。

かつてのホルクハイマーの論文はまとめられ入手しやすくなっているので、参考のために現在までに出版されたものを記しておきたい。尚、本の形式をとっていないものは省略。

„Zeitschrift für Sozialforschung” 8 vol. (学派の総要) は A. Schmidt の編集ですべて復刻された。総要に発表されたホルクハイマーの論文の大部分は。

„Kritische Theorie” 2 vol. Fischer Verlag. 1968 に収められている。

„Anfänge der bürgerlichen Geschichtsphilosophie” 1930, 復刻版. Fischer Verlag. 1971

„Dämmerung” unter dem Pseudonym Heinrich Rejus. 1934, (Notizen に再収録)

„Autorität und Familie” Paris. Alcan. 1936.

„Dialektik der Aufklärung” mit Adorno. 1947 復刻版. Fischer Verlag. 1971

„Vernunft und Selbsterhaltung” 1941-2, 復刻版. Fischer Verlag. 1970

„Sozialphilosophische Studien” Fischer Verlag. 1972

„Gesellschaft im Übergang” Fischer Verlag. 1972

„Zur Kritik der instrumentellen Vernunft” Fischer Verlag. 1974

„Verwaltete Welt?” Arche Verlag. 1970

„Die Sehnsucht nach dem ganz Anderen” Furche Verlag. 1970

„Notizen” Fischer Verlag. 1974 (1950-70 の間の覚え書き、アフォーリズム等をあつめたもの)

„Aus der Pubertät”. Kiesel Verlag. 1974. (青年時代、20年以前の小説と日記をあつめたもの)

他の学派のメンバー、Adorno, Benjamin, Pollock 等の全集も着々と刊行されつつある。ホルクハイマーの'20年代の資料の公開が期待される。

1977. 1. 15.

(もりた かずみ)



マルクス読書会

マルクスは、たしかにある意味で、我々の時代とは異なる過去の時代の子である。では、マルクスから、今日の我々の問題意識にとって重要であるような、いかなる示唆をひき出しうるか？ マルクス解釈の通説・諸説に依存するのではなく、自分の眼で、マルクスを内在的に読もう。参加者の問題意識の多様性を最大限に尊重しつつ、共通のTextを讀んで議論していく研究会です。初期マルクスから、ヘーゲルもからめて、資本論にいたる重要なTextを、順に扱っていきます。研究会(月に1回)の日・時・所・Text・Reporter等については、その都度、研究室前の掲示板に掲載されます。どなたでも、自由に参加下さい。

世話人 宮野勝